

かもしれない。しかしながら、何故に「優位権」を（包括的な）「主権」に読み替えることができるのか。あるいは、スウェーデンが得た「領邦優位権」とフランスの「優位権」の相違は何か。この箇所の論述には、もう少し丁寧な説明が欲しかった。

第三章「帝国等族としてのスウェーデン」では、帝国の裁判権、皇帝によるインヴェステイトール（叙任）、帝国戦争における援助義務といった諸課題に即して、条約規定の現実化ないしは受容の過程が検討される。皇帝と帝国、帝国諸侯、ラント等族の三者間の関係が明らかにされており、興味深い。

終章「総括と展望」では、これまでの検討内容が総括され、今後の課題が示される。総括された諸論点の中から、諸国家体系の形成に関する著者の結論を引用しておく。「普遍主義国家が相互の同等性を認め合うという矛盾によって普遍主義そのものが空洞化されることによつて、あらゆる諸国家は同等であるという政治理念がこの中から成長することになる」（一七〇頁）。ここには、歴史的所産としてヴェストファーレン条約を読み解き、グロテイウスを採用することにより、ブルクハルト説の敷衍を試みた、著者の到達点が示されている。

この他にも、国制史研究と国際法史研究のクロスオーバーの位置にたつ本書には、著者の着眼点の良さを示す論点が見出される。研究史の正確な理解に基づくこれらの論点そのものは、正当である。冒頭で本書を「好著」とした所以もそこにある。一方で、本書のオリジナリティはどこにあるのか。研究史の整理においても、一例を除いてスウェーデン人による研究成果が参照されていないこと、国際法史の先

行研究（明石欽司氏）とはどこが異なるのか、など感じた疑問は多い。著者の今後に期待したい。

（高根大学教授）

藤本茂生 著

『子どもたちのフロンティア』

—— 独立建国期のアメリカ文化史 ——

（ミネルヴァ書房・二〇〇六年五月刊・四六八頁）
三一六頁・本体価格三、五〇〇円

森本 あんり

数年前のことだが、ニューヨーク州オルバーニーの近郊を走っていて、たまたま「グレート・パリントン」という名の町を通りかかった。今でも木立の中に家々がまばらに建つだけの小さな町だが、その時まったく唐突に、その町の名をどこかで読んだことがあるのを思い出した。それは、サミュエル・ホプキンスというアメリカ独立期の神学者が牧師をしていた町なのである。ホプキンスは、最初の奴隷廃止論者の一人で、ハリエット・ビーチャー・ストウにより小説の題材にもされた興味深い人物であるが、その彼が住んでいたのが、当時は先住民部族の名を取って「ホザートニック」と呼ばれていたこの町であった。本の中でしか読んだことのない歴史の中の町が、突然自分の目の前にたちあらわれ、しかもそれがかくも小さな目立たぬ田舎町であったということに、しばし目眩のような感触におそわれたのを覚えている。

藤本茂生氏の近著『子どもたちのフロンティア』

は、まさにそのようなニューヨーク州の小さな町に生きた独立建国期の人々の暮らしを、子どもと大人という世代間の関係という視点で切り取って見せてくれる好著である。著者にはすでに『アメリカ史のなかの子ども』という前著があり、そこで一七世紀ニューイングランドから一九世紀中西部までという時代的にも地理的にも広範な文脈で同主題が扱われているが、今次の出版はこれまで光をあてられることのなかった一九世紀初頭のニューヨーク州中部を扱っている。もともとそれは、単に特定一地方に限局された子ども像や家族像ではなく、多少ともこの時期のアメリカの子どもたちと共通する一般的な姿を描き出すための断面図であるといえよう。

なぜニューヨーク州なのか。「フロンティア」といえば、ふつうわれわれが思い浮かべるのは中西部であり、子どもとのかかわりでフロンティアを描いたものといえば、中西部の『大草原の小さな家』や南部の『ハックルベリー・フィンの冒険』であろう。だが、右に触れたホプキンスの町名「ホザートニック」からもわかるように、フロンティアはニューイングランドでもすぐ足許の裏山に広がる現実であった。

独立直後のアメリカは、早婚と高い出生率により人口比に若年層が急増した時代である。著者の調査によれば、なかでもニューヨーク州は、人口面でも経済面でもきわめて顕著な発展を遂げた地域の一つであった。この発展と変貌ぶりは、同州中部のキャッツキル山地を舞台とする子ども物語『リップ・ヴァン・ヴィンクル』がはからずも例証している通り

である。

このような執筆のための資料を提供しているのが、のちにそれぞれ上院議員と牧師になった二人の自伝であり、あるいは十代の少女が残した克明な日記である。これらに加え、著者は同時期に出版された新聞や旅行記、それに人口動態などの統計資料を参看している。「おわりに」に記されたところによれば、ニューヨーク州クーパーズタウンの歴史協会古文書館と郷土史家に文献蒐集上の助力を得たということである。こうして集められた資料は、邦訳されているものとはあまりなく、せいぜいマイクロフィルムによる保管があれば幸いで、なかには手書きやタイプ草稿のものもある。本書の価値は、まずはこうした一次史料の丹念な読み出しに裏付けられた丁寧な議論にあるといえよう。

埋もれかかった史料を発掘して昔の人々の暮らしぶりを再構成してみせるというアナール派以来の社会的視点は、子ども史研究にとっては今なお欠かせないものである。子どもが権力史たる正史や公の歴史記述に登場することは少ないからである。とはいえこれらは、子どもたち自身の生を無媒介に記録したのではなく、後年の反省と回想にくるまれて提示された再現像である。著者は、こうした自伝や日記の文章にあらがちな脚色や美化を勘定に入れた上で、なおそこから貴重な実像を読み取る努力を示している。

フロンティア史の研究を専門としない評者には、これらの手法やそこから導き出される結論の数々が先行する研究史から見てどれほど一般的であり、あるいはどれほど独創的であるのかについては、十分

な判断ができない。ただ、フロンティアの家族が常に過渡期にある存在であるため、子どもたちは親がつくった家庭を自分たちの世代で再現することを期待できない、といった指摘(二二頁)は、より広いアメリカ的な人生観や世界観の形成と変貌を望みさせる点で、評者には興味深く感じられた。

子どもの目から見ると、深い森林におおわれたフロンティアは、恐怖と危険に日常的に晒される苛酷な生を意味している。だがその森は、中世ヨーロッパ人の表象の中にある魔術的な暗闇ではなく、豊かな益をもたらす資源として、またそのなかに抱かれて豊かな心性を育むことができる自然として描かれている(四八頁)。著者が(先行研究に導かれつつ)指摘するように、このような自然観の変遷には、ロマン主義という時代の思潮もあずかつていよう。

ロマン主義的な視線は、先住民の家族と育児に向けた肯定的な評価にもあらわれている。先住民たちは、一方で残忍かつ瘁猛ではあるが、他方では崇高で率直な人々として敬意をもつて描かれるようになってきている。彼らに比べると、「うわべだけ文明化されたキリスト教徒の白人」の方がより不正で残忍である、という自省的な記述も見られる。評者が小さな註をつけるのであれば、このような発言は、実のところ植民地時代から白人入植者の間で繰り返された常套句の一つにすぎない。現実の対応と異なり、少なくとも回想の中でみずからの謙虚さの証拠としてそのように記すことは、彼らにも比較的容易なことだったのであろう。また先住民の母親は、ヨーロッパ人よりも長期間にわたって授乳するため、生涯出産率が低くなり、産婦の負担が少なく、その結果

子どもにより深くこまやかな愛情を注ぐことができるといふ指摘もある。

本書には他にも各所に貴重な指摘がちりばめられている。初期アメリカ史において黒人奴隷以前に重要な労働力を提供した若年の「年期奉公人」や、その延長として早くから認知され一般化していた非血縁の養子制度などの記述(第三章)もその一端である。フロンティアの経済は、自然の中の自給自足経済から市場経済へと移行していったのではなく、むしろはじめから換金価値のある農林商品の生産を意図して市場経済を前提としていた(二三四頁)、という指摘も意外で新鮮であった。また、一部の熱心なファンのためには、一八三九年にこの地で創案されたとされる「ベースボール」に触れずにおくわけにはゆかないであろう。野球はクリケットを起源とするという通俗説とは異なり、実は一九世紀初頭までにこの地域でよく見かける光景となっていた、とのことである(一七六頁)。

総じて、「フロンティアと子ども」というテーマは、章ごとの切り分けが難しく、章題と内容が必ずしも相即していないように思われるところがあつた。たとえば「死と別れ」や「衣食住」は、第三章「フロンティアでの労働」とどのような内容的連関におかれているのか。第四章では、幼女を鞭打つて死に至らした若い教師の裁判と処刑の行方が克明に紹介されているが、これは「フロンティアでの学びと遊び」という章題からはかなり逸脱して見える。こうした緩やかな論題の括り方のためか、本書は全体として、「子ども」という鍵語を頼りに寄せ集められた雑多な観察の集成、という印象を与える。ある

いはこれは、社会史的なアプローチに内在する弊かもしれない。

また、著者も同意されるに違いないが、「子ども」の年齢上の定義を選挙権や民兵制度における定義と連動させて論ずるのは、おそらく一面的であろう。

「子ども」と「大人」の境目は、結婚や就業などの社会慣習や制度面、大学入学年齢などの教育面、あるいは宗教上の成人儀礼面など、多様であり得るからである。なお、「初期アメリカの時代にはティーンエイジャーがいなかった」(一八八頁)というくだりは、はたして同時代の他文化に比べてどれほど特異なことなのか、よく理解できなかった。

最後に、今日的な専門教育との関わりで興味深かった二点を挙げておく。われわれは、たとえばリンカン大統領が丸太小屋から身を起こして弁護士になつたことを知っているが、そのような出自の彼がいつたいどこで法律家としての専門知識や資格を身につけたのか、と訝ることがある。その答えは意外と簡単である。著者によれば、そもそもこの時代には法律家のための体系的な教育などあつてなきがごときであり、始まつたばかりの専門学校も「訴状書きや令状書き程度」の勉強を提供するだけだつた(二〇一頁)、ということである。

このことは、評者自身が牧師養成の神学教育について抱く理解とも通底する。第二次信仰復興運動により多くの若者が回心して牧師職を志したが、その急増した志願者たちを教育するために、はじめて専門の神学校が生まれた。著者は、もっぱら三〇年前の特定一論文に依拠しつつではあるが、ここで二点の正当な指摘をしている。一つは、神学校が今日も

アメリカの高等教育を特徴づけるリベラルアーツ大学の先駆者となりその発達を促進させた、という点であり、もう一つは、それまで牧師養成のために特別な職業訓練は施されていなかった、という点である(二二九頁)。ただし、今日ではどちらの指摘もより広範な文脈に位置づけられねばならない。実は、この二点とともに、一七世紀のハーヴァード以来続いてきたプロテスタント的な大学理念の当然の帰結なのである。説教を主たる任務とするプロテスタント牧師には、典礼を主たる任務とするカトリック司祭とは根本的に異なつた準備教育が要請される。

ハーヴァードが牧師養成という課題を掲げながらも、その教育課程に狭義の神学や教理の教育がなく、もっぱら聖書の原典解釈とその実践の適用という課題のための一般的なりべラルアーツ課程をもつていたのも、まさにこのためであつた。なお、「序階」はカトリック聖職者の職階に用いられる言葉なので、本書に登場するようなプロテスタントの牧師たちには「按手」なり「任職」なりの言葉の方が適切であろう。

本書を通して多くのことを学ばせていただいた。研究書としてばかりでなく、読み物としても魅力に富んでいる。フロンティア時代のアメリカを知るための信頼できる文献として、専門家ばかりでなく一般の学生にも薦めたい一冊である。

(国際基督教大学教授)

常松 洋 著

『ヴィクトリアン』

アメリカの社会と政治』

(昭和堂・二〇〇六年二月刊・A5判
二九四頁・本体価格四、〇〇〇円)

安田 こずえ

アメリカ史の文脈で革新主義時代の全体を扱うことは難しい。なぜなら、多様な要素が混在しているばかりか、それらが相反する形で、しかし、結果としては同じ方向性を示すからだ。これまで多くの歴史研究家が自らの物差しを持ち出し、この時代の分析に挑戦してきた。本書『ヴィクトリアン・アメリカの社会と政治』では流動的で境界の曖昧な範疇を指す概念ではあるが、一九世紀以降のアメリカ社会を表象する「中産階級」という分析的枠組みを用いている。本稿ではまず、著者が「中産階級」をどのように定義しているかを述べ、次に大まかな内容と主張を紹介する。そして、本書に対する評者の立場を提示し、結論へと導く。

「中産階級」とは、ヴィクトリアニズムという觀念形態、すなわち白人のプロテスタントに限定された価値体系と不可分のものとして提示される。そして、「中産階級」は(1)社会の中間的地位にあつて、(2)自らも変化し、また、曖昧ではあるが、(3)均質的であつた。内容としては、第一章から第三章までの第一部で、消費文化の社会的影響を主として「中産階級」と絡めて考察し、第四章から第六章までの第二部で、一九世紀後半の都市(とりわけ、シカゴ)